

大学院生卒業エッセイ

年刊・石井隆太ニュース（2019年2月号）： おっさんずラブ編

第12期大学院生 中村 世名
(第10期OB)



石井隆太（以下、普段の呼び方である「りゅうたん」）の母である石井啓子さんから、菊盛ゼミ生まで、大好評連載中であったこの『年刊・石井隆太ニュース』だが、本号をもって5年間の歴史に幕を閉じることとなった。なぜなら、4月からりゅうたんが僻地（福井だったか、福島だったか）に赴任することになり、我々の7年間の関係も3月をもって幕を閉じることとなったためである。

我々は、月曜日には授業で、火曜日にはサブゼミで、水曜日には学内のバイトで、木曜日には先生相談で、金曜日には本ゼミで、そして土曜日では学会で、逢瀬を重ね、愛を育んできた。その軌跡をすべて語るには、最大3ページという本誌の制約は、あまりにも短い。そこで、今回は、我々にとって最も重要なあの日のエピソードを、感傷に浸りながら振り返っていきたい。

◆テキサス、ポテト事件（2015年11月）

あれは、私とりゅうたんが、一緒に行った最初で最後の海外学会でのことだった。学会は、アメリカのテキサス州のサンアントニオという街で開催された。研究費という資金を手に入れたここ数年間は、旅行、

もとい、海外学会に年に2、3回は参加する国際マーケティング学者りゅうたんであるが、このサンアントニオでの学会は、りゅうたんにとって、初の海外学会であり、初のアメリカ上陸であった。そのため、りゅうたんは、アメリカの事情についてあまりにも無知であった。この無知さが、後に、かの有名な「テキサス、ポテト事件」を引き起こすことになる。

事件は、サンアントニオの中心地であるリバーサイドのレストラン「County Line Barbeque」で起こった。このレストランは、テキサスバーベキューのお店で、看板メニューのポークリブステーキをはじめとするメインの肉料理とサイドメニュー2つで構成されたプレート注文スタイルであった。アメリカのステーキと聞けば、良識ある日本人ならば、1人前が日本人に1人では食べることが難しい量であることを、容易に予測できるであろう。レストランのアメリカ人ですら、日本人には1人前が多いということを経験から理解しており、サイドメニューだけ注文してくれれば、メインの肉料理はシェアしても良いと教えてくれた。しかし、りゅうたんは無知であった。そしてアホであった。「俺は1人前食べたいし、食べられるからシェアはしない」。このように言い放ち、私からのシェアの提案を断ったのである。それだけなら、まだ初めてアメリカに来た日本人のミスあるあるで済んだかもしれない。しかし、りゅうたんのアホさは、あるあるの水準には留まらなかった。1人前のポークリブステーキを注文したりゅうたんは、2つのサイドメニューを訪ねられ、「マッシュポテト and フライドポテト, please」と答えたのである。サイドメニューの選択肢には、サラダやスープもあったのにもかかわらずである。「正気か?」と尋ねる私に、りゅうたんは「いいんだ。俺はポテトが食いたいんだ。」と答えた。



「County Line Barbeque」の看板メニュー：ポークリブステーキ

その後の結末は、読者の予想するとおりであった。先に出てきた山盛りのマッシュポテトとフライドポ

テト、意地をはってポテトを頬張りりゅうたん、食べきれず余るポテト、追い打ちをかけるように出てきた日本のレストランだと4人前はあろうかというポークリブステーキ、絶句するりゅうたん、半分以上余ったポークリブステーキ、周りからの非難・中傷、逆ギレするりゅうたん、拗ねて喋らなくなるりゅうたん…。

今思えば、あの時の出来事こそが、りゅうたんの心を、私から年増の女へと移らせてしまったきっかけだったのであろう。あのとき、キレて拗ねるまでりゅうたんを責めなければ、現在の状況は大きく変わっていたかもしれない。あの年増とりゅうたんが結婚するという結末にはいたらなかったかもしれない。あの年増に結婚を急かされて、りゅうたんが僻地に赴くこともなかったかもしれない。あの年増の趣味である商社マンや広告マンのようなチャラついたファッションスタイルになどならず、今も茶色いボロボロのシャツを着ていたかもしれない。鼻毛も伸びっぱなしだったかもしれない。

我々の未来は、あの「テキサス、ポテト事件」が起こったときから、決まっていたのだろう。もし、タイムマシンがあれば、2015年11月に戻り、もう一度「お前は1人前を食べられない！ましてやサイドメニューにポテトを2つも頼んだら、半人前だって食えない！冷静に考えたらわかるだろ？目を覚ませ！俺とシェアをしよう！」と言って、強く抱きしめたい。しかし、過去に戻ることはできない。私とりゅうたんは別々の道に行くこととなってしまった。でも、最後にこれだけは言いたい。「さよならりゅうたん。今までありがとう。Forever りゅうたん。福島でも頑張る。」



左からりゅうたん、年増の女、著者。「County Line Barbeque」にて。